

工場内請負労働

鉄砲鍛冶が職工になった 明治の産業革命



Text = 曲沼美恵

フリーライター。1970年生まれ。福島大学教育学部卒業。日本経済新聞社を経て、現在に至る。著書『ニート—フリーターでもなく失業者でもない』（玄田有史氏との共著、幻冬舎）

Illustration = 下谷二助

参考文献

『新版 職人の世界・工場の世界』（尾高煌之助著、NTT出版）、『日本労務管理史研究—経営家族主義の形成と展開』（岡宏著、御茶の水書房）、『職工事情（中）（下）』（大丸義一校訂、岩波文庫）

明治の昔、鉄や造船、機械などの工場では、「助っ人」たちが数多く働いていた。重工業の顧客と言えどもっぱら軍という時代、工場の需要は、戦争の有無に大きく左右された。欧米に追いつき追い越せと最新の技術を移植したものの、それを使いこなせる人材はまだ育ってはいない。そんな人材難と激しい好不況の波を背景に、工場へと駆り出されていったのが、鉄砲鍛冶などの職人たちだった。

彼らの働き方は、もともと職人の世界にあった「請負」を工場内に持ち込んだもので、「内部請負制」と呼ばれる。職人たちのボス、つまり親方は、工場内のまとまった仕事を入札で請け負い、配下の徒弟たちを使って仕事をこなした。ややこしいことに、親方もその下で働く徒弟たちも、形式上は工場と雇用契約を結んでいた。にもかかわらず、材料の調達に始まり、業務遂行に必要な人員の確保や育成、さらには仕事の配分や賃金の分配に至るまで、マネジメントはすべて親方たちが握っていた。工場は単なる作業場に過ぎなかったのだ。

工場が現場を直接管理できないこの仕組みは、しばらくすると弊害ばかりが目につくようになった。というのも、実際の生産にかかる費用が請負金額より安く収まれば、その余剰金はすべて親方の懐に入る。半面、請負価格をオーバーして親方が十分な賃金を払えなくなれば、徒弟たちは工場に泣きついた。親方による賃金のピンハネも横行したが、下手に文句を言って親方たちの機嫌を損ねれば、たちまち工場が回らなくなる。経営者にしてみれば、需要が不安定な時代であればこそ、我慢できる仕組みだったのだろう。

やがて、米国流の生産管理システムが導入されると、それぞれのやり方に固執した職人仕事は、むしろいらなくなった。親方たちが工場から姿を消すと、代わって、教育を受けた技術者（エンジニア）たちが工場を仕切るようになっていった。さて、社員にもなりきれず、居場所をなくした職人たちはどこへ向かったのか。中小の町工場へと流れ、「渡り職人」として活躍するか、自ら工場を経営したという。

大企業の工場から職人仕事が消え、親方たちが消えても、伝承された技能は形を変え、場所を変えて生き残った。中小企業大国・日本の萌芽は、こんなところにもあったのだ。